

(10) [一般発表]

基底共有型非負値行列因子分解を用いた楽器音の音色変換

Timbre conversion of music instruments using basis-shared nonnegative matrix factorization

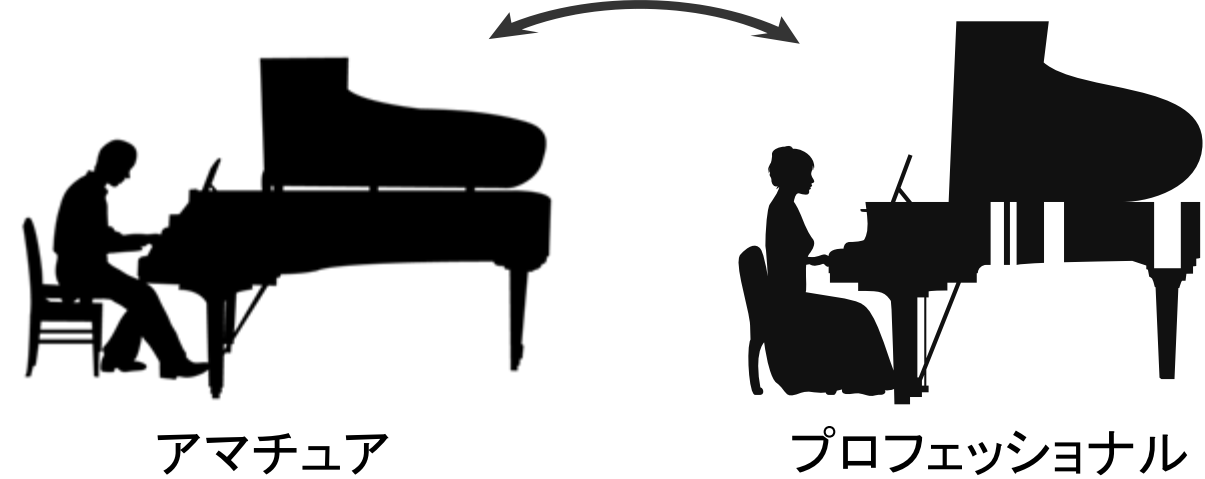
北村大地 (香川高専)
香西海斗 (香川高専)*

*現在、豊橋技術科学大学

研究背景

- 人は楽器音の音色の違いを感覚的に表現
 - 例: 「きらびやかな音」、「やわらかい、温かみのある音」
 - 定量的に表現する方法はあまり確立されていない

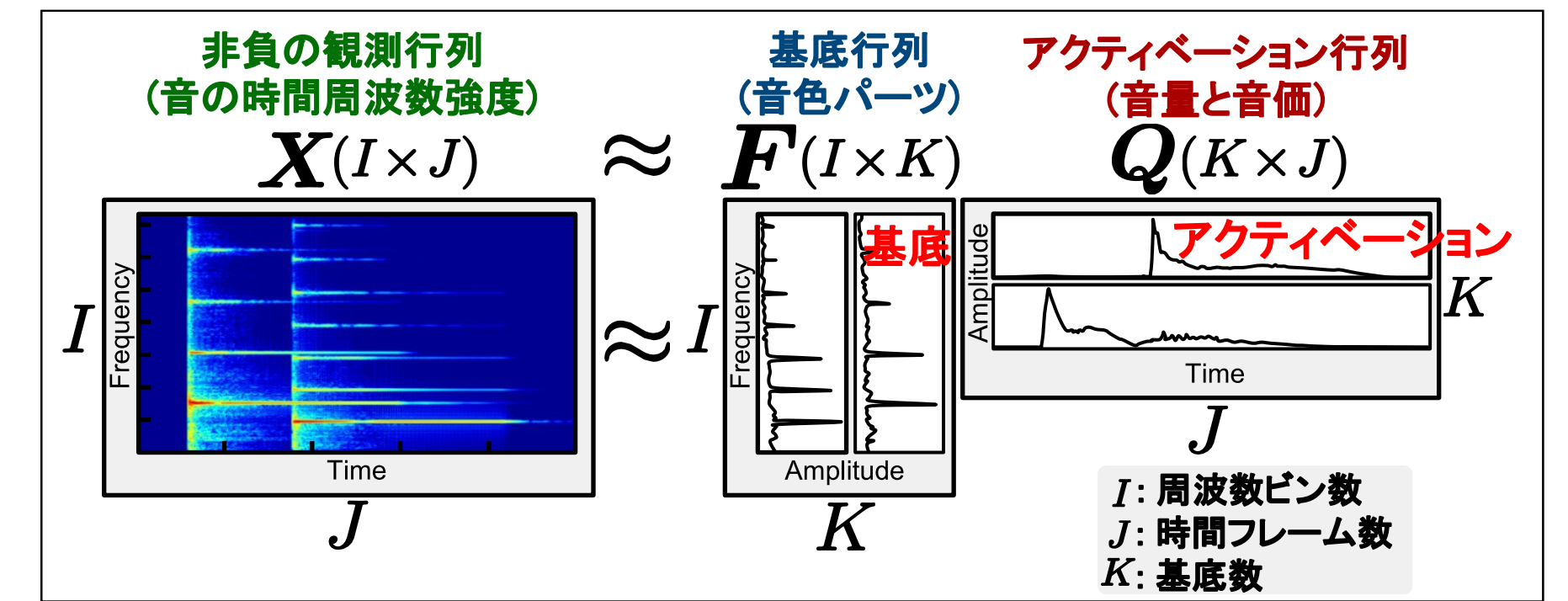
両者の違いは?



- 複数の楽器音の違いを定量的に表現
 - アマチュア奏者の上達の支援
 - 芸術的価値の高い楽器の設計製作
 - 音色変換, 楽器音識別, 音楽検索等にも応用可能

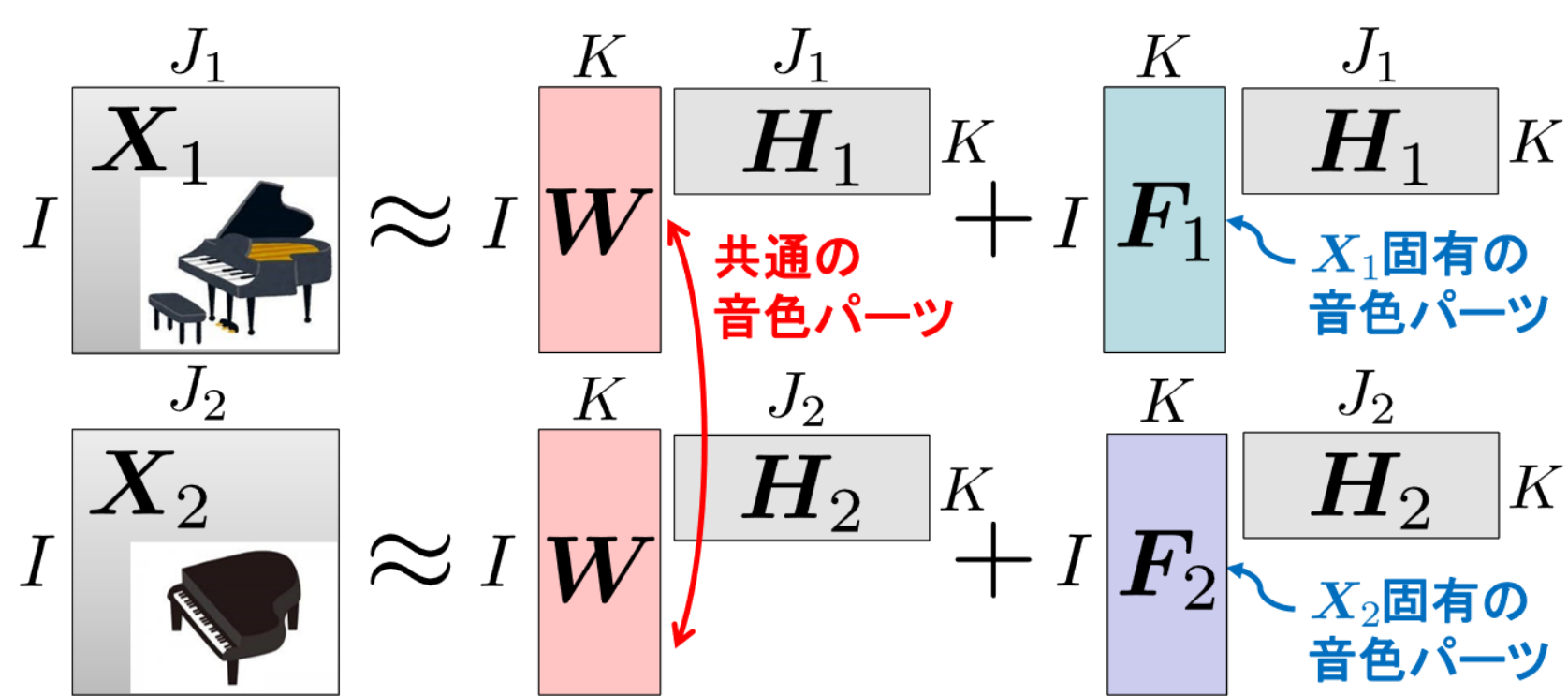
本発表の概要とNMFに基づく音響信号の分解

- 非負値行列因子分解(NMF) [Lee+, 1999] に基づく解析
 - 複数楽器音信号間に**共通する音色成分**
 - 各楽器音信号の**固有の音色成分**
 } この2成分を同時にNMFで抽出
- 音響信号におけるNMFの適用
 - 振幅スペクトログラム X を基底 F とアクティベーション Q に分解



基底共有型NMF (BSNMF) [香西ら, 2021]

- 音源 X_1 と X_2 に対して**共通の基底行列 W** と**固有基底行列 F_1 と F_2** を用いて分解



- W は2つの楽器音の共通の音色 (スペクトル)
- F_1 と F_2 は各楽器の固有の音色 (スペクトル)

BSNMFの最適化問題

$$\min_{W, F_1, F_2, H_1, H_2} \mathcal{D}(X_1 | W H_1 + F_1 H_1) + \mathcal{D}(X_2 | W H_2 + F_2 H_2)$$

X_1 と $W H_1 + F_1 H_1$ の距離 $\quad X_2$ と $W H_2 + F_2 H_2$ の距離

両項を同時に小さくするような変数行列を推定

距離関数

$$\sum_n \mathcal{D}_{KL}(X_n | W H_n + F_n H_n) = \sum_{n,i,j,n} \left[x_{ij,n} \log x_{ij,n} - x_{ij,n} \log \left(\sum_k w_{ik} h_{kj,n} + \sum_k f_{ikn} h_{kj,n} \right) - x_{ij,n} + \sum_k w_{ik} h_{kj,n} + \sum_k f_{ikn} h_{kj,n} \right]$$

[香西ら, 2021]

$$\sum_n \mathcal{D}_{Eucl}(X_n | W H_n + F_n H_n) = \sum_{n,i,j,n} \left[x_{ij,n} - \left(\sum_k w_{ik} h_{kj,n} + \sum_k f_{ikn} h_{kj,n} \right) \right]^2$$

- 最適化には補助関数法 [Hunter+ et al., 2004] を用いる

二乗Euclid距離に基づくBSNMF

最適化関数

$$\mathcal{J} \equiv \sum_{n=1}^N \sum_{i=1}^I \sum_{j=1}^{J_n} \left[x_{ij,n} - \left(\sum_{k=1}^K w_{ik} h_{kj,n} + \sum_{k=1}^K f_{ikn} h_{kj,n} \right) \right]^2$$

$$= \sum_{n=1}^N \sum_{i=1}^I \sum_{j=1}^{J_n} \left[x_{ij,n}^2 + \left(\sum_{k=1}^K w_{ik} h_{kj,n} + \sum_{k=1}^K f_{ikn} h_{kj,n} \right)^2 - 2x_{ij,n} \left(\sum_{k=1}^K w_{ik} h_{kj,n} + \sum_{k=1}^K f_{ikn} h_{kj,n} \right) \right]$$

補助関数を設計

$$\mathcal{J} \leq \mathcal{J}^+ = \sum_{n=1}^N \sum_{i=1}^I \sum_{j=1}^{J_n} \left[x_{ij,n}^2 + \sum_{k=1}^K \frac{w_{ik}^2 h_{kj,n}^2}{\alpha_{ij,nk}} + \sum_{k=1}^K \frac{f_{ikn}^2 h_{kj,n}^2}{\beta_{ij,nkn}} - 2x_{ij,n} \left(\sum_{k=1}^K w_{ik} h_{kj,n} + \sum_{k=1}^K f_{ikn} h_{kj,n} \right) \right]$$

- $\alpha_{ij,nk}, \beta_{ij,nkn}$ は補助変数

二乗Euclid距離に基づくBSNMF

- 導出される更新式

$$W^+ \leftarrow W \otimes \frac{X_1 H_1^T + X_2 H_2^T}{W H_1 H_1^T + F_1 G_1 H_1^T + W H_2 H_2^T + F_2 G_2 H_2^T}$$

$$F_1^+ \leftarrow F_1 \otimes \frac{X_1 G_1^T}{F_1 G_1 G_1^T + W H_1 G_1^T} \quad F_2^+ \leftarrow F_2 \otimes \frac{X_2 G_2^T}{F_2 G_2 G_2^T + W H_2 G_2^T}$$

$$H_1^+ \leftarrow H_1 \otimes \frac{W^T X_1}{W^T W H_1 + W^T F_1 G_1} \quad H_2^+ \leftarrow H_2 \otimes \frac{W^T X_2}{W^T W H_2 + W^T F_2 G_2}$$

\otimes はアダマール積 (行列の要素ごとの乗算)
分数は \oslash ともされるアダマール除算 (行列の要素ごとの除算)
 T は行列の転置

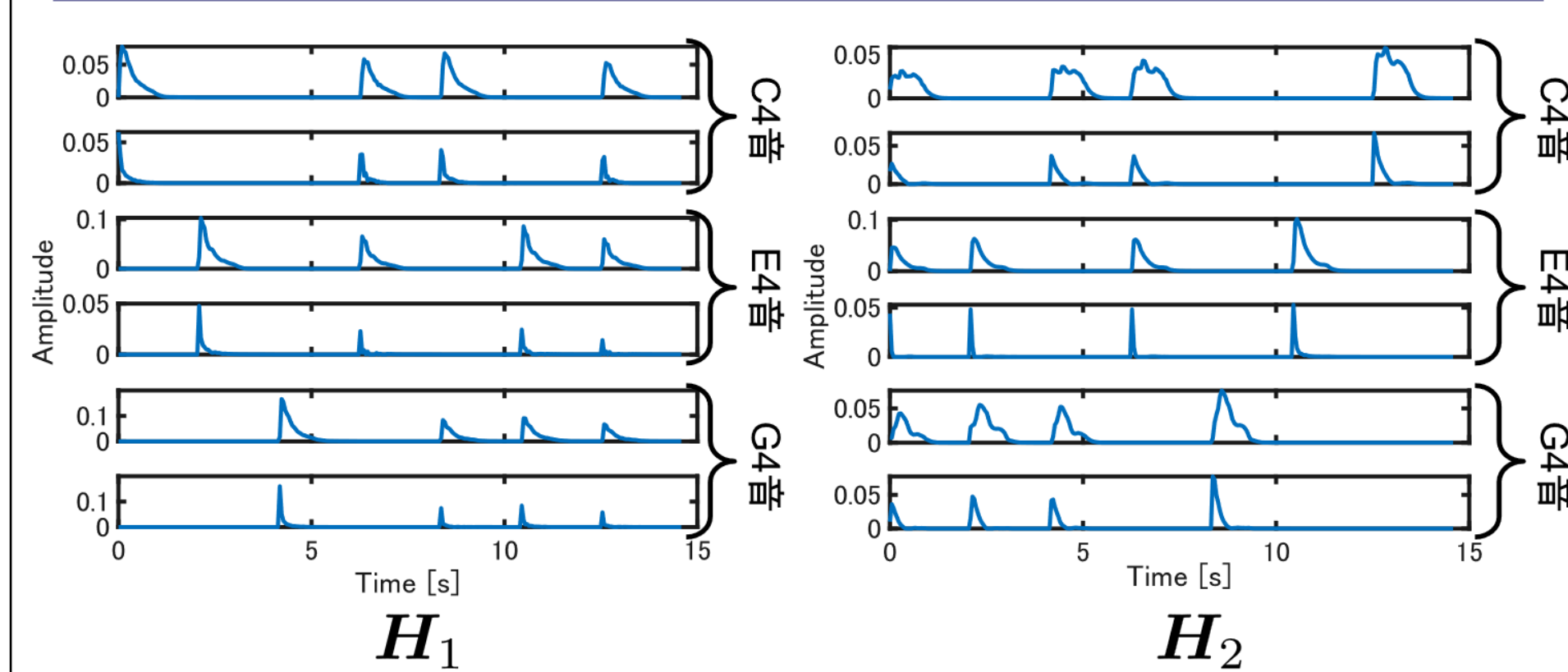
音響特徴量抽出実験: 条件

- 各実験条件

	音源1	音源2
VSTプラグイン	lowa Piano	4Front Piano
STFTの窓長	92.9 ms	
STFTのシフト長	46.4 ms	
窓関数	Hamming窓	
乖離度関数	一般化KLダイバージェンス	
反復回数	1000回	
基底数	6本	

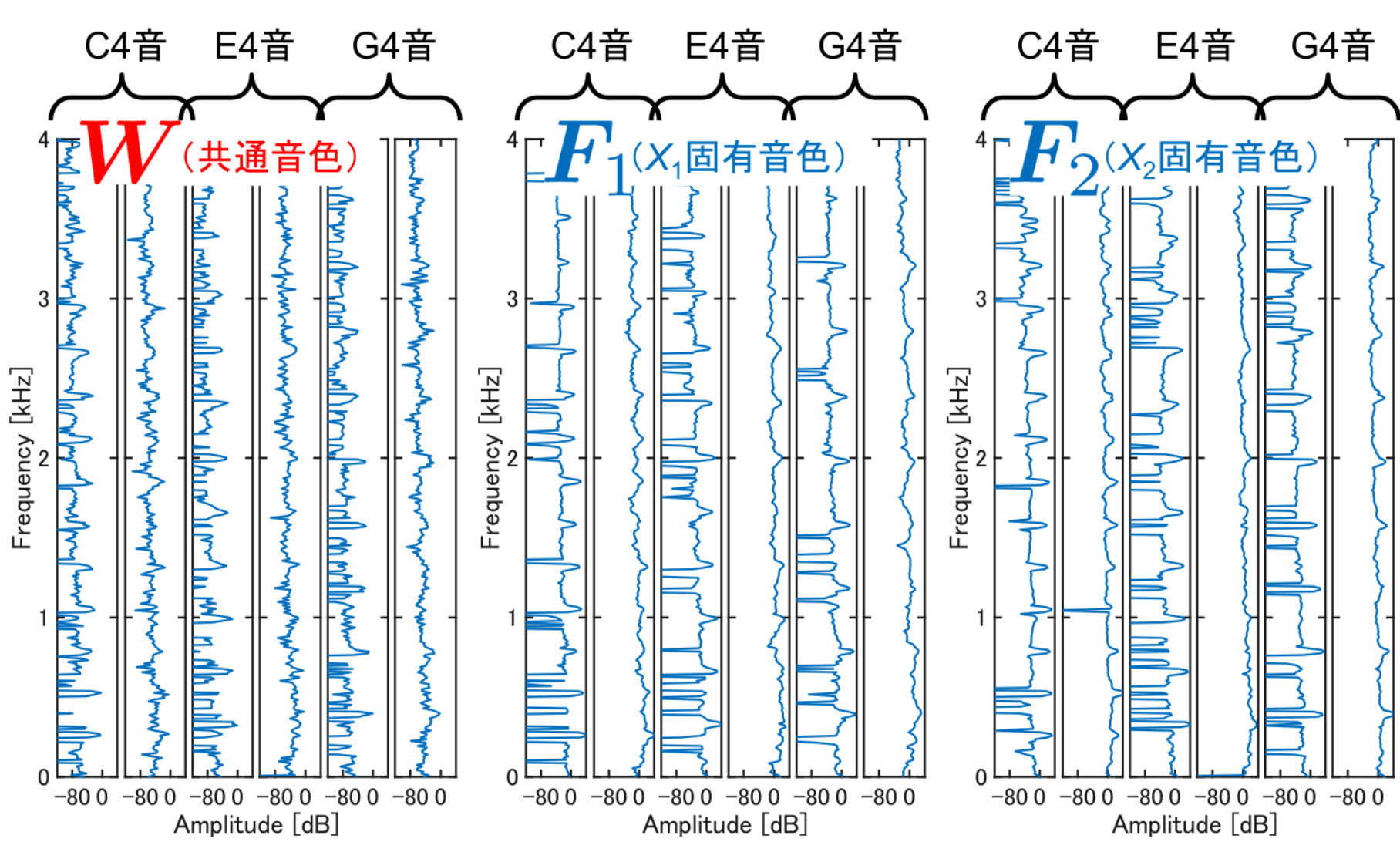


音響特徴量抽出実験: 結果



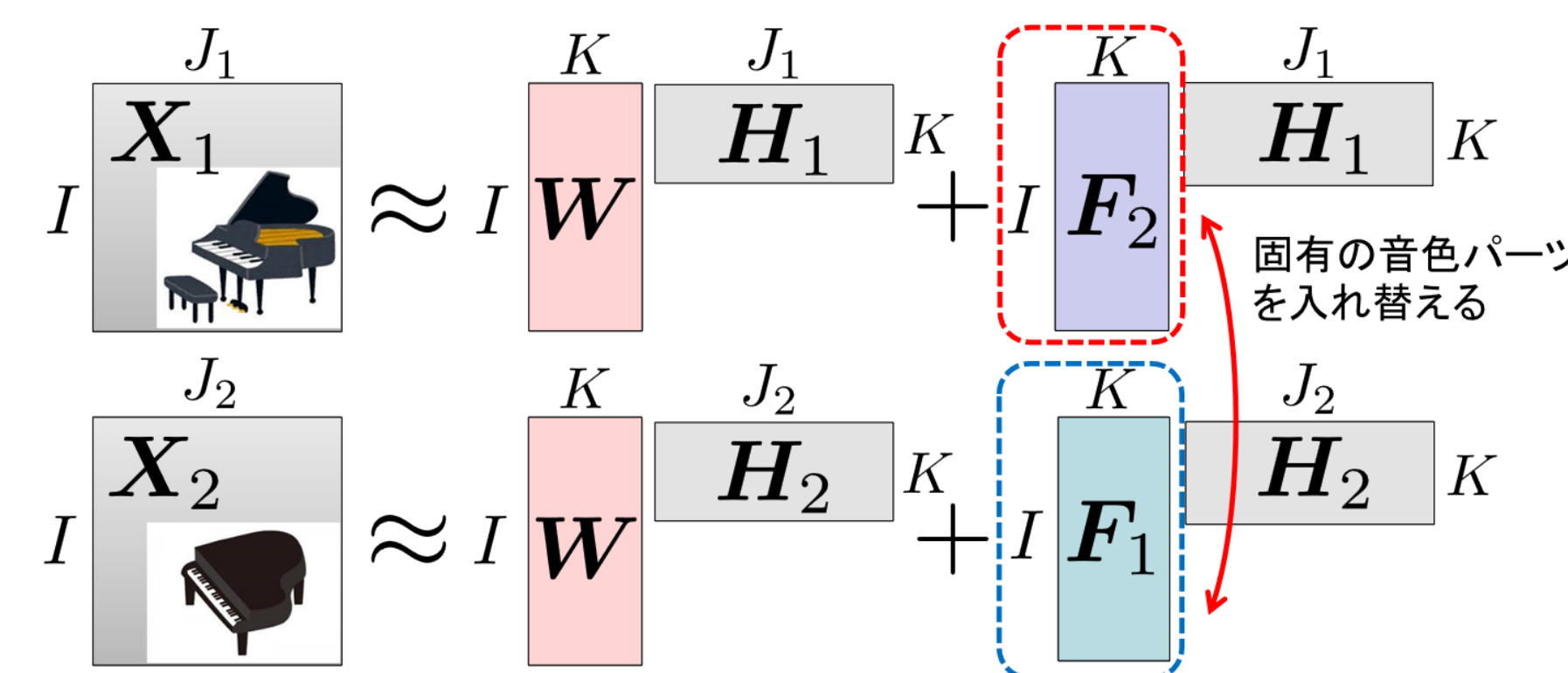
音響特徴量抽出実験: 結果

- 打撃部分に明確な差異



音色変換への応用: 方法

- 固有基底行列 F_1 及び F_2 のみを入れ替えることで, 音色の変換を実現



音色変換への応用: スケールフィッティング

- $W H_n$ と $F_n H_n$ のパワー比は楽器音 n によって異なる
 - W と H_n の間にはスケールの任意性が存在するため
 - 単に固有基底行列 F_1 及び F_2 を入れ替えただけでは音が歪む

固有基底行列の列ベクトルをスカラー倍できる変数を導入 (対角行列との積)

$$\begin{cases} W H_1 + F_2 H_1 \\ W H_2 + F_1 H_2 \end{cases} \rightarrow \begin{cases} W H_1 + (F_2 D_1) H_1 \\ W H_2 + (F_1 D_2) H_2 \end{cases}$$

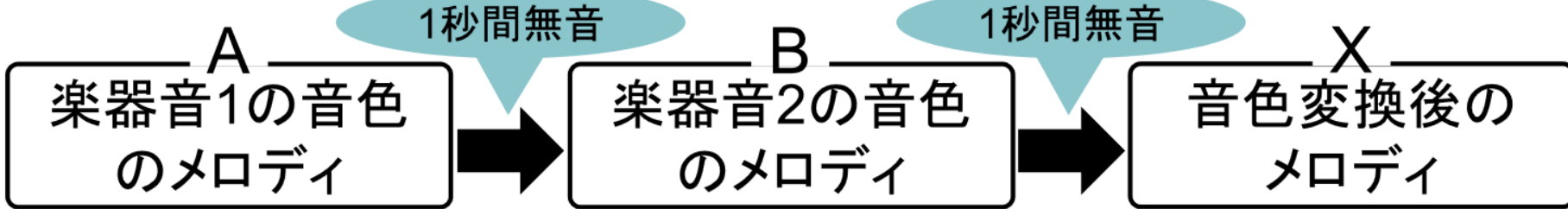
対角行列変数

スカラー倍をスケールフィッティングにより最適化

$$\min_{D_1, D_2} \mathcal{D}(X_1 | W H_1 + F_2 D_1 H_1) + \mathcal{D}(X_2 | W H_2 + F_1 D_2 H_2)$$

音色変換への応用: 実験条件

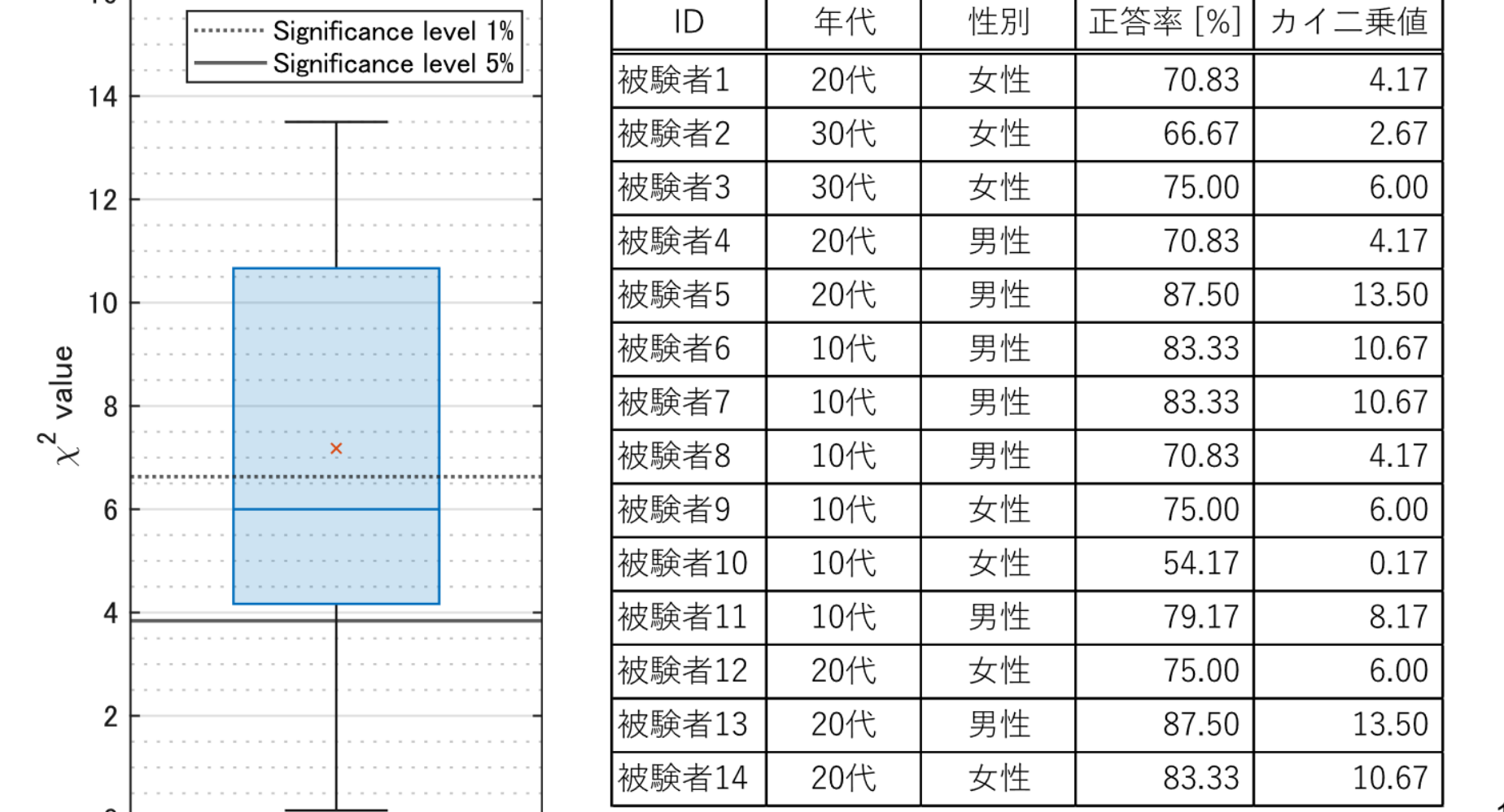
- ABX法を用いて音色変換の精度を主観評価
 - X は「 X_1 の音色を X_2 に変換したもの」または「 X_2 の音色を X_1 に変換したもの」のいずれかをランダムに提示
 - 2年以上の楽器経験者14名を対象



- lowa Piano (グランドピアノVST)
 - Sketch Upright Piano (アップライトピアノVST)
- の2種類のピアノ音源間で音色を変換
- Score 1-6 (Musical notation)

音色変換への応用: 実験結果

- 有意水準5%で帰無仮説「AとBには差がない」を棄却可
 - 音色変換が高精度に達成されていることを裏付けている



デモンストレーション

- 音色変換の結果例

